

Preparation and evaluation of IADL improvement program for the elderly requiring support




メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Murai, Chiga メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28524

平成 22 年 2 月 10 日

博士論文審査結果報告書

報告番号 医博甲第2113号
学籍番号 0527022028
氏名 村井千賀

論文審査員

主査 染矢富士子 (教授) 
副査 少作隆子 (教授) 
副査 柴田克之 (教授) 

論文題名 Preparation and evaluation of IADL improvement program for the elderly requiring support

要支援高齢者のための IADL 向上プログラムの評価と開発

論文審査結果

高齢者の活動能力は、加齢に伴い手段的 ADL (以下、IADL) や基本的 ADL が低下する。したがって、介護状態の予防にはまず IADL の低下を防ぐことが重要であると考えた。IADL へのアプローチの報告は作業療法の領域では脊髄損傷者や脳卒中後遺症者に対する報告はあるが、心身機能障害のない高齢者での報告はない。本研究は、高齢に伴う廃用症候群で IADL が低下した要支援 1、2 の者を対象に、困難な IADL の共通因子を分析し、IADL の向上を図るプログラムを立案し、訪問・通所介護事業所における有効性を明らかとすることを目的とした。

【研究 1】要支援 1、2 で訪問介護サービスを受けている 608 名(男性 129 名、女性 479 名)に、家事援助を受けている IADL 項目を家事実施チェック表(56 項目)により調査した。主成分分析の結果、第 1 因子「協調性・巧緻性」、第 2 因子「移動・運搬」、第 3 因子「上肢の動き」、第 4 因子「握力やつまみ力」の 4 つの家事困難共通因子が抽出された。それを基に IADL 向上のためのプログラム(以下プログラム)として、身体の関節の動きやストレッチなどを主体とした基礎的運動プログラムと、IADL 困難因子に対応させたボールなどを操作する IADL エクササイズの種類を作成した。【研究 2】訪問介護を利用する要支援 1、2 の 9 名に、研究 1 で作成したプログラムの有効性を検討した。全 10 回の介入を行い、身体機能と IADL を評価した。椅子からの立ち上がり回数($P<0.05$)、4 つの家事困難共通因子の巧緻性・協調性($P<0.01$)、移動・運搬($P<0.05$)で有意に改善があった。【研究 3】通所施設での介入の有効性を検討するために、介護予防通所施設を利用している要支援 1、2 者 10 名で 12 回介入を実施した。その結果、個々の基本的 ADL や身体機能にあまり影響はなかったが、IADL には改善を認めた。プログラムは身体機能の向上よりも対象者の主体的な精神的意欲も関与している可能性が示唆された。

本研究から高齢者の IADL を困難にする要素として「協調性・巧緻性」、「移動・運搬」、「上肢の動き」、「握力やつまみ力」が影響していることを確認できた。また、その要素を基に作成したプログラムを実施することで、訪問・通所介護とも IADL 改善が得られた。しかし、IADL の改善が研究への参加による利用者等の意識が影響したことも考えられ、プログラム自体の有効性までは検証することができなかったという研究の限界はある。高齢者の活動性を高めるリハプログラムは社会からの要望が高く、その点からも本研究の意義は大きいと考えられ、博士(保健学)を授与するに値すると評価する。